

鴻 koh

月刊俳句誌

平成31年2月1日発行  
(毎月1回1日発行)  
第14巻第2号 通巻152号

2 月号

2019



蛇穴につくづく山の遠くなる

炉に座して狼の声まぼろしに

切干のからから山の眠るころ

ばつたんこの音よ寒くなる寒くなる

霜柱踏み源義よ桂郎よ

句歴問ふ人あり枯蘆原の風

ほのぼのと雨後の日の差す冬菜畑

越冬の鳥どちに雨ふかぶかと

諸粥をことこと小林一茶の忌

六畳に三人だけの年忘れ

大鷹の腋くろぐろと冬の雨

イエスにも釈迦にも逢へず日向ぼこ

牡蠣雑炊みちのくにまた夜がくる

# 霜柱

主宰作品

増成栗人

荒川心星

## 生けるもの

一人来て萩曼陀羅の寺にゐる  
ぬばたまの櫛の林の月夜茸  
千草八千草ゆふべの風を起こしけり  
鯨日和指呼に小さき島一つ  
しばらくを座し湖べりの虫月夜  
綿虫の小さき青を手のひらに  
落葉ひらひらやはらかな風の中  
生けるもの眠らせてゆく冬の雨

廃線に拾ふ犬釘冬はじめ  
藪払ひ覚ます廃線冬あたたか  
走り根をいくつも跨ぎ日短し  
トンネルの黒ずむレンガ冬の鴉  
廃線のトンネル歩く小春かな  
霜月や木叢にひびく水の音  
冬紅葉足もとを川流れけり  
冬霞はるかに高層ビル浮かぶ

## 犬釘

半谷洋子



# 羽音集

選 栗人成増



手つかずのケーキ一皿星月夜 横須賀 鈴木 崇  
 エレベーター閉まりし後の秋思かな  
 赤い羽根領収証の上に置き  
 篆書書く筆に粘りの出て小春  
 ブルースと芥子蓮根月冴ゆる  
 湯上りの髪を束ねて星月夜 豊川 水谷はや子  
 聞き慣れし嬰の片言秋ざくら  
 皿に有るΣのイニシャル後の月  
 自転車と思ひきり漕ぎ文化の日  
 編みあげしキューピーの服十三夜  
 鳥ごゑを抱き沼辺の葦枯るる 我孫子 相川 健  
 百段の磴あり神の留守なりき  
 初冠雪雲間の青が筒抜けに  
 木枯一号老いの一徹通す日々  
 返り花存分に日を吸うて咲く  
 霧晴るるバルーンの影岩肌 大阪 太田 絢  
 天高しコーラン響く町にゐる  
 海峡は秋舳先の国旗なびかせて  
 宝物展の列ゆらゆらと秋桜  
 秋耕のたちまち点となる車窓

谷口摩耶



## 冬空

使ひ捨てられし鳥の巢冬空に  
 寒菊よあと二千歩は歩かねば  
 掃き終へし庭師と年を惜しみけり  
 一木の梢先掲げ初御空  
 今年また花びら餅をいただきぬ  
 年玉に添へぬひぐるみ渡しけり  
 クッキーと紅茶の香り室の花  
 うねり来る川の形に虎落笛

# 楽庵閑話 8

虫丸



先生  
俳句は本来  
二句一章で詠むほうが  
良い句になるので  
しょうか？

発句から  
生まれた  
俳句が  
切れをもつては  
自然だし  
二句一章で生まれる間は



読者に  
文字に表されていない  
背後の広がりを読み取る  
想像力を呼び起こさせる  
良い方法だよ

だからといって  
二句一章のかたちでさえ  
言えないよ  
一句一章で  
一眼に  
詠んだ  
ほうが良い  
場合もあるよ



二句一章も  
一句一章も  
句を作る  
うえでの  
方法論であって  
本質ではないからね

ワインドアップか  
ノーワインドアップかは  
方法論であって本質は  
ストライクコースへ  
アウトをとれる球を  
投げられるかだと  
いうようなものだよ  
なるほどー



どっちで投けても  
打たれる場合は  
どうすれば……